

【国宝（美術工芸品）の指定】

<彫刻の部>

（重要文化財を国宝に）

木造騎獅文殊菩薩及脇侍像 <sup>かいけいさく</sup>快慶作 <sup>く</sup>四軀  
像内に建仁三年十月、南無阿弥陀仏、  
<sup>けんにな</sup>巧匠安阿弥陀仏等の銘がある



【大きさ】	像高	<sup>もんじゆぼさつ</sup> 文殊菩薩	1 9 8 . 0 cm
		<sup>ぜんざいどうじ</sup> 善財童子	1 3 4 . 7 cm
		<sup>うてんのう</sup> 優填王	2 6 8 . 7 cm
		<sup>ぶつだはりさんぞう</sup> 仏陀波利三蔵	1 8 7 . 2 cm

【所有者】宗教法人文殊院（桜井市大字阿部645）

<sup>けんにな</sup>建仁3年（1203）から承久2年（1220）にかけて快慶が製作した群像。中国  
<sup>ごだいさん</sup>五台山を舞台とした文殊説話を主題とする図像になる。

近年の調査研究の成果を踏まえ、大仏再興に関連する記念碑的造像として、また運慶と並び鎌倉時代を代表する仏師である快慶の代表作の一つとして国宝に格上げする。

（鎌倉時代）



写真提供：文化庁（2カットとも）

【重要文化財（美術工芸品）の指定】

< 絵画の部 >

（未指定文化財を重要文化財に）

けんぼんちやくしよくしやうとくたいししやうまんぎやうこうさんず  
絹本著色聖徳太子勝鬘経講讃図

一面

【大きさ】縦 210.5 cm 横 177.4 cm

【所有者】宗教法人法隆寺（生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1）

聖徳太子が35歳の折に後の橘たちばなでら寺の建つ場所で推古天皇のために勝鬘経を講讃したとされる場面。

全体に傷みが甚だしいが、部分的に確認できる彩色文様などの描写からは平安絵画の余風をうかがうことができる。鎌倉初期に活躍した南都絵仏師の尊智そんちひつ筆と伝承されている。

現存する講讃図のうちでは最大規模、最古本の一本で、後世の作品に与えた影響も大きい。

（鎌倉時代）



写真提供：文化庁

<彫刻の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

どうぞうしやかたほうによらいざぞう  
銅造釈迦多宝如来坐像

く  
二軀

【大きさ】 像高 釈迦如来 25.0 cm  
多宝如来 24.2 cm

【所有者】 宗教法人東大寺（奈良市雑司町406-1）

『法華経』見宝塔品所説の釈迦如来・多宝如来の二仏並坐像で、戒壇院の壇上多宝塔に安置されていたと考えられる。やや粗略な作風ながら奈良時代盛期の作とみられ、鑑真来朝に伴う東大寺戒壇設立当初の作である可能性がある。

類例のない釈迦多宝如来像の遺品であり、古代彫刻史ならびに仏教史上の重要作例である。



釈迦如来



多宝如来

写真提供：文化庁（2カットとも）

<彫刻の部>

(県指定有形民俗文化財の一部を重要文化財に)

もくぞうのうきようげんめん  
木造能狂言面

三十面

【大きさ】縦16.3～21.4cm

【所有者】宗教法人<sup>てんかわじんじや</sup>天河神社 (吉野郡天川村大字坪<sup>つぼのうち</sup>内107)

中世以来弁才天の靈地として信仰を集めた<sup>てんかわしや</sup>天河社における<sup>えんのう</sup>演能に関係した能狂言面の一括資料。半数が桃山時代以前に遡る古能面で、<sup>えいきよう</sup>永享2年(1430)<sup>かんぜじゆうろう</sup>観世十郎奉納の銘のある<sup>じようめん</sup>尉面や<sup>えんとく</sup>延徳2年(1490)十二座大夫奉納銘のある<sup>さんばそう</sup>三番叟などの重要作例を含む。

能面の定型成立を考えるうえで欠かせない一括資料である。

(南北朝～江戸時代)



尉

写真提供：文化庁

<書跡・典籍の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

ほけきょう  
法華経

けんじ  
建治二年八月四日宗性願文

八巻

【大きさ】縦26.3cm 全長985.4cm

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（奈良国立博物館保管）

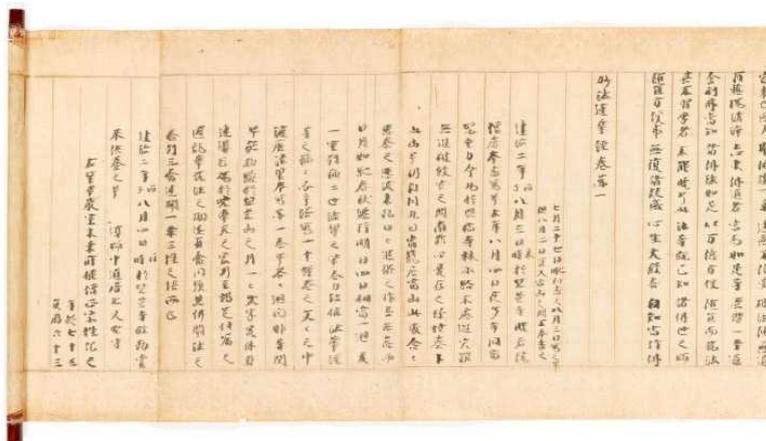
本巻は鎌倉時代を代表する東大寺学僧である宗性<sup>そうしやう</sup>（1202～1278）の発願<sup>ほつがん</sup>になる法華経で、建治2年（1276）書写になる。奥書から、年来同宿していた稚児の殺害事件が写経の動機であること、宗性とその周辺の19人の僧侶らによって書写された寄合<sup>よりあひまよう</sup>経で、一周忌にあたる日に供養したことが知られる。

中世寺院社会の実態を知る上で貴重である。

(鎌倉時代)



巻首



巻末

写真提供：奈良国立博物館（2カットとも）

<書跡・典籍の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

しんしゅうじょうどおうじょうでん まきげ  
新 修浄土往生伝巻下

一帖

ほうげん べんしやう  
保元三年六月十七日弁 昭書写奥書

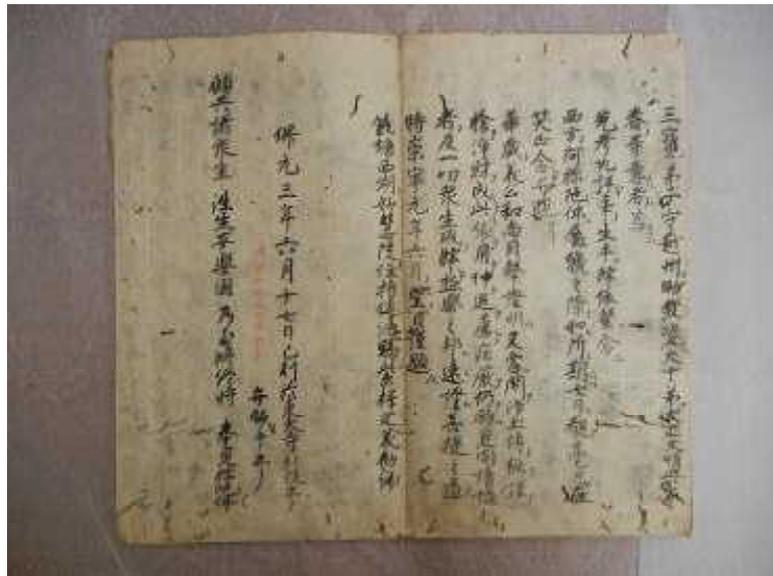
【大きさ】縦28.4cm 横16.0cm

【所有者】宗教法人東大寺（奈良市雑司町406-1）

本書は、保元3年（1158）、東大寺弁昭書写になる古写本で当初の姿・内容を伝える。

末法思想まつぽうによる極楽浄土の希求を反映した往生伝受容の南都における広がりおりのほんが注目される。また、年紀ねんきの判明する折本の古い事例としても貴重である。

(平安時代)



写真提供：文化庁

<古文書の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

まこのしまぬしげ <sup>てんぴょうほうじ</sup> 天平宝字二年七月廿八日  
万昆嶋主解  
しはいしやせんかんきようしよしよくもつようちよう  
紙背写千卷経所食物用帳

一通

【大きさ】縦28.9cm 横24.7cm

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（奈良国立博物館保管）

しやきようしよ きようじ まこのしまぬし <sup>ふさんげ</sup>  
写経所の経師であった万昆嶋主が、天平宝字2年（758）に出した不参解（欠勤届）  
である。

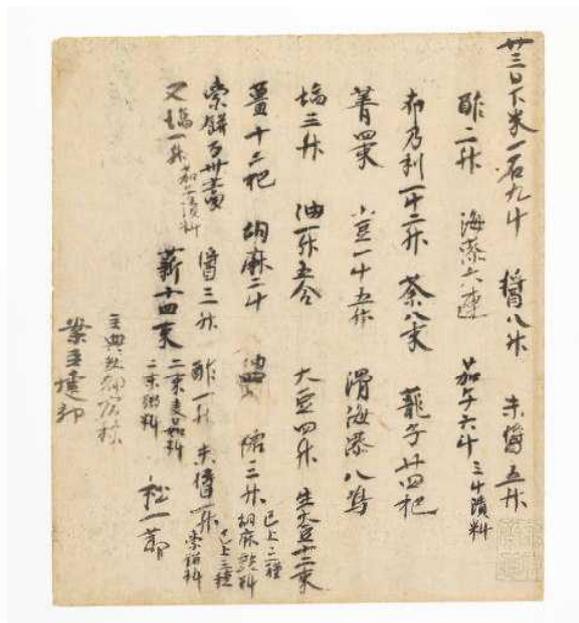
しゆうとめ  
欠勤の理由は「姑」の看病であり、当時の生活の有様や生の声を伝える貴重な史料である。

しはい  
紙背文書「写千卷経所食物用帳」があり、写経生に支給する食物の詳細が知られる史料としても重要なものである。

(奈良時代)



万昆嶋主解



紙背 写千卷経所食物用帳

写真提供：奈良国立博物館